

SECTION.1

MBAとは？

MBAとは、Master of Business Administrationの略で、日本語に直すと、経営学修士号もしくは、経営管理修士号と呼ばれる学位です。この学位は、経営学の大学院修士課程を修了すると授与されます。MBAでは、企業が利益（経済的価値）を出して、永続的に存在するための経営管理手法を学びます。学ぶ内容は、経営学に関する全般的な知識です。具体的には、経営戦略、マーケティング、組織論、組織行動学、アカウンティング、ファイナンス、オペレーションマネジメント、生産管理、情報マネジメント、経済学、統計学など、企業経営をしていく上で必要となるすべての知識を学びます。このように経営学全般に関することを学ぶため、修了後は経営者、起業家となる方や、コンサルティング・ファーム、ベンチャーキャピタル、投資銀行、事業会社の経営企画部門・マーケティング部門・財務部門などで実務に従事する方が多いです。

MBAの歴史をたどってみると、1881年にウォートン・スクールが最初のビジネススクールとして設立されました。そして、1920年代にはハーバード・ビジネス・スクールが状況分析と経営判断の能力を訓練するケースメソッドという教育アプローチを開発し、この方法は多くのビジネススクールに採用されるようになりました。

日本では、慶應義塾大学大学院経営管理研究科（KBS）が1962年に創立された、最も歴史のあるビジネススクールです。現在では、全国の大学院でMBAコースが開講されています。国公立大学では京都大学、神戸大学、大阪

大学、兵庫県立大学、筑波大学、東京都立大学、横浜国立大学、一橋大学、東京工業大学、北海道大学、小樽商科大学、九州大学などで開講されています。私立大学では先の慶應義塾大学以外では、青山学院大学、明治大学、立教大学、中央大学、早稲田大学、東洋大学、多摩大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学、名古屋商科大学、グロービス経営大学院など50以上の大学で開講されています。国内MBAの詳細は、第2章1項の「エリア別国内MBA一覧」をご覧ください。

詳細は第6章で説明しますが、本書を読み進める上での前提知識として、MBAで学ぶ意義を簡単に説明しておきます。MBAで学ぶ意義として最も大きな点は、企業経営に関するゼネラリストとしての知識が得られることによって、将来、経営のポジションに就くための準備ができることです。日本の場合は崩れてきたとはいえ、いまだに多くの企業が年功序列を採用しています。そのため、経営のポジションに就くのは比較的年齢が上がった時点になります。それまでは現場で一つの職能のプロとして仕事をしていきます。一つの職能というのは、営業なら営業だけをする、製造なら製造だけをする、ということです。一つの職能のプロとして経験を積んでいった先に経営者としてのポジションが待っているというのが日本企業のマネジメントの実態です。しかし、そこには大きな問題があります。それは経営者というのは、すべての職能（たとえば、営業、製造、研究開発、会計・経理、ファイナンス、マーケティング、全社戦略、事業戦略）を把握した上で意思決定をすることが仕事なのですが、一つの職能しか知らない人にはそれができないということです。

では、どのようにしてすべての職能に関する知識を得るのでしょうか？その実務で学ぶことができない職能に関して学ぶ機会がMBAであり、MBAでの学習によって将来経営のポジションに就いた時に全社的な視点での確な意思決定ができるようになるのです。

以上のように、経営のゼネラリストとしての知識やスキルを得られるのがMBAなのです。そのため将来的に経営のポジションを担うビジネスマンに人気となっています。

SECTION.2

MBAとMOTの違い

ここではMBAとMOTの違いについて説明します。

まずは、取得できる学位や、学ぶ内容の違いについて説明します。

MBAとは、説明した通り、Master of Business Administrationの略で、日本語に直すと、経営学修士号もしくは、経営管理修士号と呼ばれる学位です。

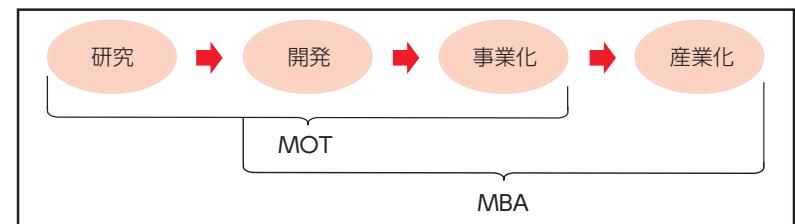
MOTとは、Management of Technologyの略で、日本語に直すと、技術経営修士号と呼ばれる学位です。MOTでは、製品開発における技術力をベースにし、研究開発の成果を商品・事業に結び付け、経済的価値を生み出すための経営管理手法を学びます。そして、技術をベースにした新たな価値創造ができる人材を育成することを目的としています。学ぶ内容は、MBAと重複する部分が多いのですが、技術と市場ニーズを結び付けるマーケティング手法・リスク管理手法、新たな技術を用いたビジネスモデル構築方法、創造力の育成法といった点がMBAよりも重視されています。修了後は、技術者を束ねる研究開発部門のリーダー（候補）、技術系のベンチャー企業の経営者、技術系ベンチャーの起業などの実務に従事する方が多いです。

次に、技術ベースの事業創出の4つのステージを用いて、MBAとMOTの違いをより根本的な点から説明します。

技術ベースの事業創出には4つのステージがあると言われています。4つのステージを時系列的に整理すると、「研究」→「開発」→「事業化」（商品化）→「産業化」となります。「研究」を進めて技術を市場ニーズに結び付け、具

体的な製品の構想（イメージ）ができなければ「開発」ステージに進めません。「開発」ステージに進んだものを製品として仕上げ、適切な経営資源を配分し、製造・販売して売上までつなげられなければ「事業化」（商品化）ステージには至りません。「事業化」（商品化）を成功させるためには、競争優位性を構築し、多くのライバル企業との生き残り競争に勝つ必要があります。これが実現できなければ「産業化」ステージには到達できません。新規事業創出の成功確率が低いといわれる理由は、このプロセスの困難さに示されていると思います。各ステージへの移行時の障壁を乗り越えていくという不確実なプロセスにおいて、いかに成功への確度を上げていくかが大切になります。MBAやMOTでは、その方法論を学ぶことは共通していますが、どのプロセスに力点を置くかが異なります。

具体的には、MBAでは上記ステージの中で、「開発」「事業化」「産業化」ステージでの経営管理手法を学ぶことが中心になります（ただ、「研究」「開発」ステージを学ばないということではありません）。MOTでは、「事業化」を意識しながら、「研究」「開発」ステージでの経営管理手法を学ぶことが中心になります（ただ、「産業化」ステージを学ばないということではありません）。



以上のように、事業創出プロセスにおいて、どのプロセスに力点を置いて経営学を学ぶか、という点がMBAとMOTの違いです。

SECTION.3

MBAと中小企業診断士の違い

ここでは、MBAと中小企業診断士の違いについて説明します。

MBAとは、説明した通り、Master of Business Administrationの略で、日本語に直すと、経営学修士号もしくは、経営管理修士号と呼ばれる学位です。

中小企業診断士は、経営コンサルタントとしては唯一の国家資格です。国家資格ですから、国家資格試験に合格することで取得できます。中小企業診断士試験に合格するために学ぶ内容は、MBAとはほぼ同じですが、正式な試験科目名としては、「経済学・経済政策」「財務・会計」「企業経営理論」「運営管理（オペレーション・マネジメント）」「経営法務」「経営情報システム」「中小企業経営・中小企業政策」の7科目となっています。この中で、「中小企業経営・中小企業政策」は中小企業診断士に特有の科目です。中小企業診断士は、中小・零細企業向けのコンサルタントのため、「中小企業経営・中小企業政策」に関して深く学ぶ必要がある点は納得できると思います。資格取得後のキャリアですが、実際に中小企業向けのコンサルタントとして独立する方、今勤務している会社の現在の業務で、中小企業診断士で学んだ知識を生かす方、コンサルティング会社への転職といった形で資格を生かす方などさまざまです。

では、MBAと中小企業診断士の共通点と相違点について説明します。

共通点の1つ目は、経営学に関する全般的な知識を学ぶことができる点です。先に説明した通り経営のポジションに就くためには幅広い分野を学ぶ必

要がありますが、MBAも中小企業診断士も、どちらも経営学に関して全体的に学ぶことができます。

2つ目は、修了後（取得後）のキャリアにおいて、独立することが可能な点です。副業が解禁になり、終身雇用が崩壊しつつある日本において会社に依存した生き方はリスクが高いです。自分の専門性やスキルを持って、自立て生きる道を模索する必要が出てきています。その際に自身の専門性やスキルを高める手段として、MBAも中小企業診断士も非常に有効です。

次に相違点です。1つ目は、学位か国家資格かの違いです。この違いが大きく影響する例として、経営コンサルタントとして独立する場合があります。中小企業診断士は国家資格のため、国に認められたコンサルタントとして、顧客の信用を得やすく、顧客獲得がしやすいと思います。MBAは学位のため、コンサルタントとしての能力を認めるものではありません。そのためMBA修了後にコンサルタントとして独立した場合に、中小企業診断士と比較すると顧客からの信用度は低いと思われます。

2つ目は、学び方の違いです。中小企業診断士は資格試験のための勉強をするので、学び方は自分でテキストを暗記したり、過去問を解いたりすることが中心です。基本的に一人で勉強します。MBAはケース・スタディで学ぶ大学院が多いです。ケース・スタディとは、企業の事例（ケース）をもとに、個人分析→グループディスカッション→クラスディスカッションという流れで、ディスカッションを通して事例を学ぶ方法です。ケース分析の予習は一人でおこないますが、授業ではグループでディスカッションをしながら、同じクラスの生徒と一緒に学ぶことになります。クラスの生徒は日本人だけでなく海外からの留学生も多く存在するため、多様性の中でさまざまな意見触れられます。このようなグループでのディスカッションを通して、組織をまとめるリーダーとしての素養を実践形式で学ぶことができます。この点は中小企業診断士とは大きく異なっていると思います。

3つ目は、人脈形成のチャンスの有無です。MBAは2年制の大学院ですので、同学年の学生同士は密なつながりを持ちます。これは大学の同期などと同じです。大学時代の同期というのは一生の友人につながる関係だと思います

す。この一生のつながりといえるビジネス上の仲間が、MBAの大学院生活の2年間で形成されます。この関係はMBAを修了した後も一生途絶えることのない貴重な人脈として大きな財産になります。例えば、起業する際に、同期の学生を誘って一緒に起業したり、大企業に勤務する友人が役員に昇進した際などは、同期が勤務する会社同士で業務提携をおこなったりすることがあります。中小企業診断士の場合は、国家資格であるため、MBAのような同期とのつながりはそれほどできません。この人脈形成のチャンスは、MBAと中小企業診断士との大きな違いだと思います。

これまで読まれた方には、MBAと中小企業診断士の両方に興味を持った方もいらっしゃると思います。双方を取得したいと考える方には、双方を効率的に取得する方法がありますので、最後に説明したいと思います。

中小企業診断士の1次試験に合格している方が、中小企業診断士養成課程を併設しているMBAに進学すれば、中小企業診断士の2次試験が免除になり、中小企業診断士の資格が得られます。中小企業診断士1次合格→MBA修了→双方を取得ということが可能になります。

この中小企業診断士養成課程を併設しているMBA大学院には、城西国際大学大学院ビジネスデザイン研究科、法政大学経営大学院イノベーションマネジメント研究科、東洋大学大学院経営学研究科、兵庫県立大学大学院経営研究科、日本工業大学大学院技術経営研究科、関西学院大学大学院経営戦略研究科（2022年から）、名古屋商科大学大学院などがあります。

MBAと中小企業診断士のダブル取得を目指す方は、まず中小企業診断士の1次試験のための勉強をします。1次試験7科目の合格が達成できましたら、次はMBA受験の勉強をし、上記大学院のいずれかに入学します。そしてMBAを修了すれば、MBAと中小企業診断士のダブル取得が達成できるのです。ぜひ挑戦してみてください。

SECTION.4

MBAランキングと意義

まず、MBAランキングとは何かを説明します。欧米では、日本の大学の偏差値のような序列が、MBAにはあります。それがMBAランキングです。高いランキングのMBAを修了した方が、平均給与が高くなったり、MBA取得前後での給与上昇率も高くなったり、キャリアアップの可能性が高くなったりします。ランキングの決定基準は、「卒業後3年間の平均給料」「MBA取得前後での給与上昇率」「現在の給料に対する、MBA費用・期間に値する価値」「キャリアアップの程度」「目的の達成率」「学校のキャリアサービス」「研究でのランキング」「留学生の数」「女学生の数」などの評価項目を総合してスコアが付けられます。そのスコアの高い順に並べたのがMBAランキングです。

このMBAランキングが持つ意味は、欧米と日本では異なります。そこで、まずは欧米において、MBAランキングが持つ意味を説明します。欧米の企業は経営者が生え抜きではなく、外部からヘッドハンティングによって招かれる慣習が存在し、経営者という職業が成立っています。そのため、経営者になってヘッドハンティングされることを望む場合は、MBAはその候補になるための条件として重要な要素となっています。欧米の企業の経営者の多くがMBAホルダーによって占められています。そして、その経営者候補となるためには、ランキングが上位のMBAを卒業した方が有利になりますので、MBAランキングは重要な意味を持ちます。

一方、日本ではどうなのかと言いますと、日本ではMBAのランキングはあまり意味を持ちません。どうしてそのように言い切れるのか、その理由を説